



裏・十字架の刻印あり

表

「切支丹信徒の根付け」

(キリスト教文化センターに展示中の「隠れキリシタン遺品収集」より)

キリスト教文化センター長 力石辰也

私たちの会話や文書の中には、たくさんのことわざや慣用句が使われています。よく知られたことわざや慣用句は、日常生活上の知恵や感性をしめすものとして私たちの心や考え方に影響を与えています。このようにことわざや慣用句は、古くからの言い伝えや、日本あるいは中国の古典から来ているものと思いますが、実はその由来を聖書に求められるものが少なくないのをご存じでしょうか。ここではそのうちのいくつかの例を見てみたいと思います。

豚に真珠
価値のわからないひとに貴重なものを与えても何の役に立たないことです。これはマタイ福音書7章6節にもなる記述があります。「神聖なものを犬に与えてはならず、また、真珠を豚に投げてはならない。」
笛吹けども踊らず
いろいろ準備をしたり、盛り上げようとしていたりしても、それに反応しない人たちがいる場合の表現です。これはマタイ・ルカ両福音書に出ています。

マタイ福音書11章17節「笛を吹いたのに、踊ってくれなかった。葬式の歌をうたったのに、悲しんでくれなかった。」
ルカ福音書7章32節「笛を吹いたのに、踊ってくれなかった。葬式の歌をうたったのに、泣いてくれなかった。」
目からうろこが落ちる
わからなかったり見えなかったりすることが、突然わかったり見えたりするようになることの表現です。日常会話にもよく使われています。

使徒言行録9章18節「すると、たちまち目からうろこのようなものが落ち、サウロは元どおり見えるようになった。」サウロとは人の名前です。初めはキリスト教を迫害していた熱心なユダヤ教徒でしたが、ダマスコというところに行く途上で、復活したキリストに出会い、「サウロ、サウロ、なぜ、わたしを迫害するのか」と呼びかけられた後に目が見えなくなっていました。アナニアというキリスト教徒がサウロのために祈るとサウロの目からうろこのようなものが落ちて目が見えるようになります。サウロはパウロと名前を変え、その後は熱心なキリスト教の伝道者となった有名な回心の場面です。

「迷える子羊」・「狭き門」など聖書にその起源を求められることわざや日本人にも有名なフレーズはまだあります。聖書を開いて探してみたり、ことわざ辞典を調べてみたりするのも楽しいと思います。
(腎泌尿器外科学教授)

シスター 小田 美津江

(マリアの宣教師フランシスコ修道会) 講演会

エチオピアでの体験から



昨年12月21日、シスター小田美津江さん(マリアの宣教師フランシスコ修道会会員)の講演会を開催しました。シスター小田は、看護師として1989年〜2010年までの21年間、エチオピアの熱帯地域

にある小さな病院や山奥の医者不在の診療所で、内戦や飢餓に苦しむ現地の人々

を献身的に支えてこられました。現在、神奈川県横浜市にある特別養護老人ホーム「聖母の園」に勤務されていますが、今春、内外の厳しい環境のもとで長年献身的に活動した医療関係者を表彰する「読売新聞主催」第41回医療功労賞「海外部門」を受賞されました。この賞は審査基準が厳しいことで知られる賞だそうです。このたび本学にて、貴重な体験談を拝聴できました機会に感謝いたします。また、医療功労賞を受賞されましたこと、心よりお祝い申し上げます。(中村 真理)



講演会に参加して

医学部6年 菱田 吉明

このたび、私はBSL(病院実習)で腎泌尿器外科を回らせていただいている際、同科の力石教授にシスター小田のご講演の話を伺い、拝聴させていただくこととなりました。

まず、恥ずかしながら今まで講演というものを聞く機会がほとんど無く、何も予備知識も持たずに参加させていただきました。しかし、シスター小田のお話は大変興味深く、そして何よりも話し方が人の心をとても安心させるものでした。このような話し方をされる方には今までお会いしたことが無く、病院実習で患者様とお話しする上で必ずやプラスになると考え、シスター小田の話の内容の他に、その話し方をも吟味させていただきますました。

お話を伺うに、シスター小田が遠地エチオピアにてご尽力された医療問題は、私たち日本の医療問題としての地域医療(僻地医療)の崩壊というものと比して、その悲惨さにおいてまさに格が違うも

のでありました。満足に治療薬、器具や治療設備の無い中、20年以上という極めて長い時間、自らの創意工夫や民間療法にて患者様やその家族にご尽力されたシスター

小田の熱意にはただ頭が下がるばかりで、ただ単に医学の勉強に励むだけであった私にとっては、将来医師としての姿勢をどのようにすべきか考えさせられるものでした。

しかし、資本は無くとも自分の体や頭を積極的に働かせ、患者様を中心とした「献身」という言葉を胸に努力を惜しまなければ光明が見えるという姿勢は、日本の医療問題に、場所や悲惨さは違えど、必ずや生きてくると感じました。

また、シスター小田がなされる足の反射療法他にも、現在の医療において詳しい機序は不明なものが多いながら、主に産婦人科などで漢方薬が積極的に使われております。このように、主に私たちが学んでいる西洋医学以外の医療にも極めて有効な医療があることを理解し、見分を広めていくこと

も全人的な医療を行う上で大変重要であることを気づかせていただきました。

このような貴重な機会をいただき、どうもありがとうございました。

医学部6年 宮治 美穂

冬休み前最後のBSLで腎泌尿器外科を回っていたところ、力石教授からシスター小田美津江講演会にお誘いを受け、貴重なお話を伺うことができました。

一番印象に残ったお話は、「美津江のマッサージ」の話でした。

それは、シスター小田がゴサ診療所を手伝い始めて間もない頃、頭部外傷の昏睡状態で運ばれてきた青年が、診療所に入院して命は取り留めたものの半身麻痺になってしまったという話でした。しかし、青年がリハビリをがんばれば必ず家に帰ることが出来るという希望を持って、毎日、朝夕、棒体操を始め、家族も協力し、本人も一生懸命努力して行い、それからシスター小田が彼のマッサージを始め、何日かかかって青年は杖を使って歩けるようになるまで回復し、喜んで退院したという話を聞いて、マッサージの力だけでなく、

初めから諦めないことの大切さを教えられた気がしました。

エチオピアでは、日本において病院にいけば適切な治療を受けられる病気が、今も未だなお十分に受けることができず、今の現代の医療で助かるはずの病気で苦しむ方々が大量に現れ、シスターのお話から再認識することができました。日本にいれば、病気になることも病院に行けば、そこには必ず医師や看護師、医療スタッフがいてくれる。そんな恵まれた環境にいたことが当たり前であり、むしろ、医療は日に日に進歩していく時代で、そのことに感謝することやありがたみを感じることもありませんでした。

しかし、その中で、世界には今なお適切な治療が受けられずに苦しんでいる人がいることを忘れることなく心にとめていかなければいけない、と感じることができました。

この講演会をおしてシスター小田美津江さんの信仰心の強さと大きな愛を持ったお話を伺うことができ、良い冬休みを迎えることが出来ました。本当にありがとうございました。

こんな質問が・・・

宗教学特任教授・宗教主事 小田 武彦

今年三月十三日に新しく選出された教皇フランシスコのニュースは、今までになく日本のテレビや新聞でも大きく取り上げられました。それで、いろいろな学生からさまざまな質問を受けました。キリスト教文化センターにとっても今年度上半期の最大トピックでしたので、この場をお借りして、そのいくつかをQ&A形式で載せさせていただきます。

Q 教皇ってなに？

A 日本語では「法王」とか「教皇」と堅苦しく訳されていますが、もともとの言葉はラテン語の「パ、ギリシア語の「パッパ」です。スペイン語やイタリア語ではそのまま「パパ」が使われ、フランス語では「パプ」、英語では「ポープ」と多少変化しています。でも直訳すると「お父ちゃん」であることに変わりはありません。全世界のカトリック信者にとつての信仰上のお父ちゃん、全世界に散らばっている諸教会の一致のシンボルとして、皆、親しみを込めて「パパ」と呼んでいます。十六世紀末頃に編纂された日本のキリシタン書（耶穌書）でも、カタカナで「パツパ」と書かれています。

Q なぜ日本では法王とか教皇って呼ぶの？

A 明治新政府は、世界各国と国交を始めた頃から、パチカンのことを「法王庁」と呼んでいたようです。それで一九一九（大正八）年に駐日パチカン使節館が東京に設置されたとき、パチカン使節は日本の政府に「駐日ローマ法王庁使節館」として届け出たそうです。でも日本のカトリック教会内部では、早い段階から「法王」ではなく「教皇」という表記が使われていました。一九八一年に歴代教皇の中で初めてヨハネ・パウロ二世が来日することになったとき、日本のカトリック教会は、日本政府とマスコミに対して「法王」ではなく「教皇」で統一してほしいと正式にお願いました。しかし日本政府からは、政変などによつて国名が変わらない限り一度登録した国名は変更できないと言われてしまいました。教会関係者だけではなく多くの歴史学者や政治学者が「教皇」を使うようになってきてはいるのですが、「法王庁」や「法王」という表記が今も混在しているのは、日本が国交を結んでいるパチカンの正式名称が「ローマ法王庁」だからです。

Q なぜ新聞やテレビが、今までにないほど新しい教皇のことを取り上げたの？

A 教皇が中南米出身者の中から選ばれたのが初めて、イエズス会のメンバーの中から選ばれたのも初めて、教皇としてフランシスコを名乗ったのも初めて、教会の暦の中で最も大切な三日間の初日である聖木曜日、「主の晩さんの夕べのミサ」を少年刑務所で捧げたのも初めて、そしてそのミサの中で、イエスが十二人の弟子たちの足を洗ったことを記念する洗足式で、二人のイスラム教徒と二人の女性を含む少年受刑者十二人の足を洗ったのも初めてというように、およそ二千年のキリスト教の歴史の中で、初めてづくしが続いたからでしょう。そしてさらに、

新教皇の気さくでありながら大きな変革を示唆する言動が報道関係者に驚きを与え続けているからではないでしょうか。

Q フランシスコって、映画「ブラザー・サン、シスター・ムー」のあの主人公？

A はい。新しく選ばれた教皇はフランシスコと名乗ることによつて、世界中で愛されている中世イタリアの聖人アシジのフランシスコになつて、自らも貧しい生き方を選択することで貧しい人々とともに歩み、非武装非暴力によつて平和の実現のために働き、あらゆる人の幸せを願つて協力と一致を推進していく生き方を選択することを宣言したのでしょう。

アシジの聖フランシスコの「平和の祈り」

神よ、
あなたの平和のためにわたしを役立たせてください。
憎みのあるところに愛が
争いのあるところに和解が
分裂のあるところに一致が
疑いのあるところに信頼が
誤りのあるところに真理が
あるように働かせてください。
絶望から希望へ
悲しみから喜びへ
やみから光りへ
わたしたちを歩ませてください。
神よ、
慰められることよりも、慰めることが
愛されることよりも、愛することができるよう
にさせてください。
与えることによつて与えられ
ゆるすことによつてゆるされ
あなたのためにいのちをささげること
によつて
永遠のいのちが与えられます。

ザンビアに行つて

医学部5年 岡村優真

私は今年の3月に約3週間ザンビアに行ってきました。ザンビアはアフリカ南部にある内陸国です。ザンビアではエイズ孤児院や病院の見学、電気も水道もない村への宿泊、スラム街への訪問などを行いました。

この3週間は終わってみればとても有意義で、素敵な経験になつ



たと思います。しかしザンビアに
いる間は言葉や、生活環境、文化、
考え方などの違いに驚き、大変だ
と感じた場面も多くありました。
挙げたらきりがありませんが、特
に言葉には多く悩まされました。

ザンビアの公用語は英語です

が、73の部族がいて各部族にそれ
ぞれの言語が存在します。都市部

では英語の話せる人は
多いですが、村では英
語の通じない場合が多
かったです。言葉で意
思疎通のとれない私は、
言葉以外の部分でザン
ビア人との関係の構築
を試みましたが簡単に
はいかず、自分の希望
や考えを伝えられずに
悔しい思いをしたこと
が何度かありました。

また医療においての
包括的ケアの大切さを、
大病院を訪問した際
再認識しました。ザン

ビアは日本とは違い薬剤を含
む医療費は無料です。しかし
病棟はプレミアムとスタンダ
ードの2つに区別されていま
した。プレミアム病棟は医療
のほか食事、看護、入浴介助
など衣食住において日本に近
いものが有料で提供され、病
室も清潔な印象でした。そし
て、キリスト教が8割以上を
占める国ならではの、各
ブロックにシスターもいまし
た。シスターは患者の精神的
ケアに欠かせない存在となつ
ており、看護師からも頼られ
る存在でした。しかし、スタ
ンダード病棟は、医療以外のサー
ビスが受けられません。病室は入
院患者の制限がなく煩雑で、食事
や衣服は患者の家族が用意し、シ
ーツの洗濯なども家族が行いま
す。家族が来られない場合、患者
は何日も服を着替えることも、食
事を取ることもできません。その
ような患者はたとえ薬があったと
しても衰弱してしまい、心が病ん
でしまう人も少なくないそう
です。医療において治療を行う以外
のケアの重要性を思い知らされま
した。



正直、ザンビアに行つて私自身
何か変わったかといわれると分か
りません。少しの勇気と決断力は
ついた自信がありますが、大きく
何かが変化したことはないと思
います。しかしその少しの変化を今
後も積み重ね、そのおかげで将来
医者になり何か大きな変化のある
自分ができることに気付く場面があ
ると嬉しいと思つていきます。よつ
てこれからもできる限りの様々な
ことにチャレンジしていきたいで
す。

キリスト教文化センター活動状況(平成24年度)

2012年度は4月より、宗教

学特任教授・宗教主事(チャプレン)として小田武彦神父が着任し、また聖堂管理責任者として元職員

の岩下光幸氏を、さらに病院総合案内にも2名のシスターを迎え、新体制となりました。平成24年度の活動内容を報告します。

5月26日

第25回日本カトリック大学キリスト教文化研究所連絡協議会(上智大学)へ参加

7月20~21日

第二回日本カトリック医療団体協議会全国大会(神戸市)へ参加

8月25~26日

日本カトリック医師会主催「第28回カトリック医療関連学生セミナー」カトリック医療の理想と現実」(南山学園研修センター)へ参加

2012年4月16日
新入生オリエンテーション

5月15日
新入生歓迎会



- 日常風景 -



10月4日
創立者等追悼ミサへの協力・参加

10月5日
解剖学遺体追悼ミサへの協力・参加

12月21日
クリスマスコンサート



シスター小田美津江(マリアの宣教師フランシスコ修道会)講演会「エチオピアでの体験から」を主催

クリスマスの集い



2013年2月26日
 本学元理事長 故・使徒トマス
 前田徳尚先生法人葬ミサへの協
 力・参加

学生の声

自分の転機

医学部2年 戸邊 友輝
 「あなたたちは、東京にストリートチルドレンがいると思いますか？」

私が中学3年生の時、歴史の先生が授業中に突然話し始めました。一冊の写真集を取り出して…。それは、歌舞伎町に夜一人でいる、5歳くらいの女の子の写真を集めたものでした。15歳ながら、衝撃を受けたことを今でも覚えています。親はいない、家もない、それも5歳で。そんなことを考えたこともありませんでした。私はもつと現状が知りたくなって、先生に休み時間中に聞きに行くようになりました。

何回か先生にお話を伺っていると、先生が会長をしているボランティアに誘われました。内容に興味を持ったので、高校1年生の夏に行ってみることにしました。ボランティアでは、2歳〜9歳までの児童養護施設の子供たちを、普段なかなか行くことのできない海に連れて行ってあげることをしていました。最初は、海で子供たちがはしゃいでいて、なんら普通の子と変わらないように思っていました。しかし、実際は違いました。

ボランティアで、8歳の男の子と仲良くなりました。その子の体調が悪いというので、一緒に海から上がり、休んでいた時でした。「僕ね、悪い子だったから、ママに捨てられちゃったの。」

突然、彼は話し始めました。私は何も返す言葉が見つかりません。

「お兄ちゃん、僕のせいでごめんなさい。僕のせいでお兄ちゃんが海にいけなんでしょう。ごめんなさい。ごめんなさい。」

「そんなことないよ。一緒にいれて楽しいよ。」と私は言ったものの、その子は暗く…

その後、キャンプファイヤーなどで笑顔を見せてくれて、楽しかったと言ってくれましたが、その時の顔は今でも忘れられません。

このことでたくさん悩み、色々な人との話を経て、児童精神科医という職業があることを知り、これになって「子供たちの心を癒したい」と思い、今に至るわけです。

マリアンナに入ってからもたくさん自分を变える出会いがありました。そのひとつにキリ文があります。前のこともあって子供と関わる方向に行きたいと思っているのですが、児童養護施設以外の知的障害児の施設などいろいろと関わっているの、自分の行こう

とする方向が分からなくなる時があります。そんな時にキリ文に行って真理さんと話します。真理さんと話していると、今まで自分がやってきたことが整理されて、行きたい方向がはっきりしてきました。また、キリ文にはたくさん本があつて、その本からも多くのヒントをもらっています。お茶やお菓子でくつろぐこともできるキリ文は、なくてはならないものになっています。

こんな感じで今までたくさんのお会いがありました。今回の衝撃的な出来事から、おバカな出来事までありますが、みんなありがとう。そして、これから会う人たちよろしく!! 私はこれからも悩みながら頑張っていきます。とりあえず、テストがんばろ。



右から2番目が戸邊くん(ピース)

特別教育施設

「聖堂」のステンドグラス



聖堂正面入り口上部の窓に裝飾されており、4場面の構成でキリストの「復活」を表している。復活の生命を受けた光が、ステンドグラスを透過し聖堂内を美しく彩っている。

絵と文 岩下 光幸

キリ文便り(編集後記)

本センターは、教育棟2階の1年生の教室に隣接していることから、毎年新年度は、新入生との出会いから始まります。はじめは新しい医学部の環境に馴染めなかったり、人間関係に悩んでいたたり、試験勉強で悪戦苦闘した後に休みにきてピアノを弾いたり、写真集や詩集を手につたり、「キリ文」に息抜きに来る学生たちが多いように思います。しかし暫くして大学にも慣れてくると、日々感じたことや思うことをそのまま正直につぶやきに来て、その時に居た友人、先輩、先生、シスター方と様々な対話がこの場から展開されていく…。

そのような中で、なぜ医者になりたいと思ったのかを将来の夢とともに熱く語ってくれたり、実習中での発見や、部活で嬉しかったこと・落ち込んでしまったこと、はたまた人生・恋愛相談など…話の内容はいろいろなのですが、そんな学生の「今」に寄り添いながら早いもので6年目に入ります。初めて出会った学生が6年生となっているのを見ると、これまでの歩みの一年一年、そのなかで出会った一人ひとりの顔

から、わずかとはいえ年月の重みを感じることもおさらず。

さて、「いぶき」は毎年10月にあるミサの時に配付されますが、昨年度の解剖「遺体追悼ミサ後にある」夫婦に話かけられたことが今でも忘れられません。よくよくお話をうかがううちに私の大学時代の友人のご両親であることが分かったのですが、その時友人のお爺様がお亡くなりになって本学にご献体下さったことを初めて知りました。そしてその場で、いのちを活かすひとならうとしている学生のみなさんの顔と友人の顔が重なって、何とも言葉では言い表せない、めぐるいのちの不思議さと重みを全身で受けとめたことを覚えていきます。

(中村 真理)



発行 聖マリアンナ医科大学
キリスト教文化センター
〒216 8511
川崎市宮前区菅生2 16 1
〇四四(九七七)八一―
編集 力石 辰也
印刷 城南印刷センター